

公立世羅中央病院だより



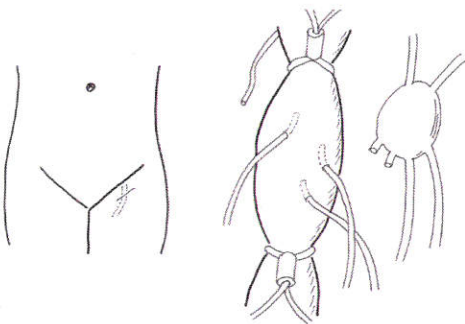
リンパ浮腫の治療(3) ー外科治療についてー

公立世羅中央病院 院長 末廣眞一

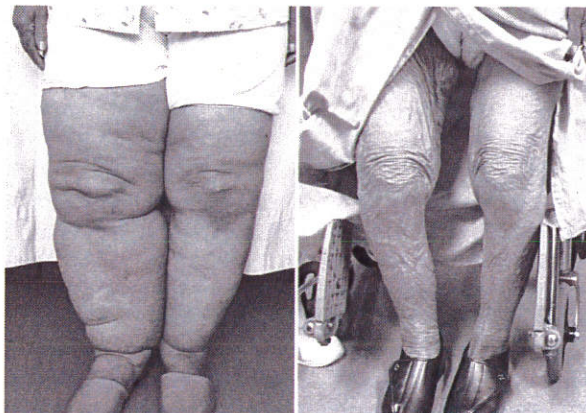
リンパ浮腫は子宮癌や乳癌などの悪性腫瘍の手術でのリンパ節摘出によるリンパ管の途絶が大きな原因です。リンパ組織は生物学的にみると非常に新しい組織であり、その機能は人によりかなり差があります。リンパ組織の発達の悪い人では先天的にリンパ浮腫になってしまいます。リンパ浮腫の外科治療とはリンパ浮腫の大きな原因であるリンパ管の途絶をリンパ管のバイパス手術により補修し、リンパ液のうっ滞を改善するという治療です。したがって手術の適応となるのは、子宮癌や乳癌などの悪性腫瘍の手術による二次性のリンパ浮腫の場合のみで、先天性(一次性)のリンパ浮腫の治療には不向きです。

歴史的にみるとリンパ管のバイパス手術は比較的新しい治療法であり、約30年前から行われています。手術法はいろいろありますが、当院ではリンパ管を太い静脈へ貫通法により端側吻合する方法を行っています。この方法の利点は一か所で複数のリンパ管を吻合することができると血流が多いためリンパ液による血管炎を起こしにくいということが挙げられます。リンパ管は非常に繊細で肉眼的に確認がしづらいため、手術はすべて顕微鏡下で行います。手術後は3日間のベッド上安静のうち患肢に圧迫ストッキングを着用していただき、マッサージなどの理学療法を行います。

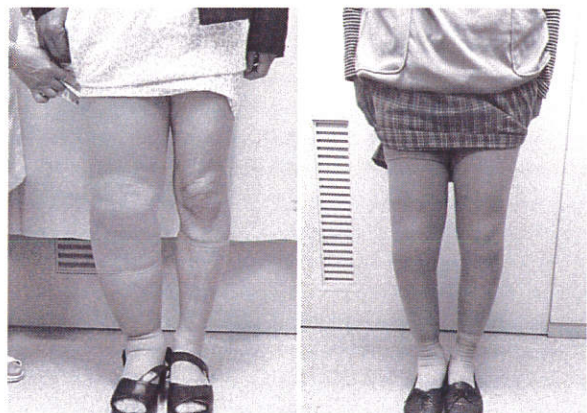
リンパ浮腫は極めて治りにくく、リンパ管のバイパス手術はリンパ浮腫治療の第一歩であります。リンパ管というのは以前にも述べましたが、腸のように蠕動運動を行ってリンパ液を輸送しています。リンパ浮腫を起こしている患肢はリンパ管の蠕動運動も失われており、手術によりリンパ液の通り道を確保し、その後にリンパ管の蠕動運動を取り戻すことが必要です。また、腫れていた患肢の皮膚や皮下組織は伸びており、蠕動運動を取り戻すことができたとしても重力のせいで腫れてくるため、ストッキングなどによる圧迫が必要です。リンパ管の蠕動運動が正常に機能し、皮膚や皮下組織が縮んで元の状態に戻った時、リンパ浮腫が治ったと言えると考えております。



当院で行っている手術法：静脈内に誘導させたリンパ管部分が逆流防止弁の役割をします。



(72歳、女性)手術前(左)と10年後(右)：手術後患肢は細くなったが、皮膚が伸びている。



(65歳女性)手術前(左)と2年後(右)：医療用ストッキング着用などの保存的治療を受けていたが、手術前では効果がなかった。